

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 27 年 6 月 18 日現在

機関番号：32707

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23531314

研究課題名(和文) 発達障害幼児の親支援プログラムの開発と効果の検証

研究課題名(英文) Development and Verification of Support Program for Parents of Infant with Developmental Disorder

研究代表者

尾崎 康子(Ozaki, Yasuko)

相模女子大学・人間社会学部・教授

研究者番号：20401797

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：発達障害幼児を育てるために必要な知識や方法を学ぶ親支援プログラムを開発した。本プログラムの背景理論として、近年多くの知見が出されている社会的認知発達理論をもとにしている。社会的認知発達理論をもとに行う療育方法は発達論的アプローチとも呼ばれており、本プログラムもそのアプローチに準拠している。開発したプログラムを、発達障害幼児の母親に対して実施したところ、一定の効果を得ることができた。

研究成果の概要(英文)：We have developed the support program to learn the knowledge and methods which parents of infant with the developmental disorder need to foster them. As the background of this program, it has been based on the social cognitive development theory. Rehabilitation process to be performed based on the social cognitive development theory, also known as developmental approach. This program also conforms to developmental approach. This program, where it was performed on mothers of infants with developmental disorders, it was possible to achieve a certain effect.

研究分野：発達障害の子育て支援

キーワード：発達障害 子育て支援

## 1. 研究開始当初の背景

2005年に発達障害者支援法が、また、2007年には文部科学省の「発達障害早期総合支援モデル事業」が開始されるなど、昨今急速に発達障害児への早期支援が注目されている。子どもが幼少であるほど、子どもの成長や発達には親の適切な関わりが欠かせないが、発達障害児の子育てには障害特性に由来する育児困難や育児不安が伴いやすいことが指摘されている。そのため、発達障害の支援を行う際には、子どもへの支援だけでは不十分であり、親への支援が大変重要となってくるが、我が国における親支援への取り組みは未だ不十分な状況に留まっている。従って、現在の発達障害児の子育て状況を鑑みると、親への子育て支援は、喫緊の課題であると言える。

最近の発達障害の子育て支援としては、主に、親子の行動変容を目標にしたペアレントトレーニングが行われていることが多い。しかし、「親子の関係性発達の歪みや遅れ」、「親の育児不安が高い」、「親が障害受容できない」など親子の関係性の基盤が脆弱な場合には、まず親子の関係性を調整すること重要である。すなわち、発達障害児の育て難さが親子の交互作用プロセスに悪循環をきたして、育児不安などを生じさせると考えられるため、発達障害児の子育て支援を行う際には、親子関係を調整することが重要となる。一方で、近年、社会的認知発達に関する知見が沢山報告されるようになった。そして、それに基づく発達論的アプローチが注目されており、親が子どもの障害特徴や発達状況に応じて対応できるようになることが提案されている。発達障害児の育て難さは、親が子どもの発達状況や障害特徴を理解しておらず、そのため子どもへの対応方法が分からないことが背景の一つにある。そこで、これらの内容を包括した子育て支援プログラムを考案していくことが有用である。

## 2. 研究の目的

研究代表者のこれまでの20年以上の子育て支援の取り組みにおいて、発達障害児とその母親に対する支援を行ってきた。その臨床経験から発達障害児の親支援には、関係性調整や社会的認知発達の視点を取り入れた包括的なプログラムが有効であることを強く感じてきた。そこで、発達障害児の包括的親支援プログラムを開発し、その効果を検証することが本研究計画の主な目的である。具体的には、以下の3つの目的に沿って行った。

- ①発達障害児の親支援に関する調査研究
- ②発達障害児の親支援プログラムの開発
- ③発達障害児の親支援プログラムの検証

## 3. 研究の方法

- (1) 発達障害児の親支援に関する調査研究

ASDあるいはその疑いと診断された幼児の母親56名(以下、ASD群)と定型発達児の母親254名(以下、定型発達群)を対象にアンケート調査を実施した。幼児の平均月齢は、ASD児が53.9か月、定型発達児が54.8か月であり、母親の平均年齢は、ASD群が38.7歳、定型発達群が37.6歳である。

調査内容は、支援ニーズの19項目、障害受容の20項目、愛着行動の5項目、間主観的把握の8項目、育児不安の8項目、親和性と自律性の10項目について、4件法で母親に尋ねた。

### (2) 発達障害児の親支援プログラムの開発

研究代表者は、2009年より相模女子大学子育て支援センターにおいて発達障害児とその母親を対象にした親子教室を春季と秋季にそれぞれ週1回、1回80分、全7回の日程で、行って来た。その親子教室において参加者からの要望や感想などを聞きながら発達障害児の親支援プログラムを開発した。

### (3) 発達障害児の親支援プログラムの検証

2013年度に親子教室において開発した親支援プログラムを実施した。対象者は、発達障害児(2~4歳)の母親7名である。子どもは、ASD児及びその疑いが5名、知的障害児が2名であった。プログラム実施の事前と事後にアンケート調査を行い、その結果を比較した。調査の内容は、育児不安6項目、愛着行動20項目、障害受容6項目、子どもの心通い合い3項目である。また、7名の結果と比較するために、定型発達群254名に対して、障害受容の項目を除く項目についてアンケート調査を行った。

## 4. 研究成果

### (1) 発達障害児の親支援に関する調査研究

親の内的要因と親子の関係性の関連性として、親和性や自律性が、愛着行動、間主観的把握、育児不安を媒介して障害受容に影響を及ぼすことを考え、図1のモデルを作成し、共分散構造分析を行ったところ、十分な適合性を得ることができた( $\chi^2(13)=14.139$ ,  $p=.364$ ; CFI=.991, RMSEA=.04, AIC=76.139)。次に、定型発達群のASD群との違いを比較するために、図2のモデルを作成し、共分散構造分析を行ったところ一定の適合性を得ることができた( $\chi^2(4)=7.519$ ,  $p=.111$ ; CFI=.985, RMSEA=.059, AIC=39.519)。

ASD群の共分散構造分析によって、能動的かつ共感的な関わりが、間主観性を高め、引いては障害受容を向上させることが示唆され、ASD児の社会的相互作用を促す親支援が有用であると考えられた。従来ASD児の親支援が、育児不安やストレス軽減という対処療法に留まる中で、一歩踏み込んだ支援の在り様への提言と捉えられよう。

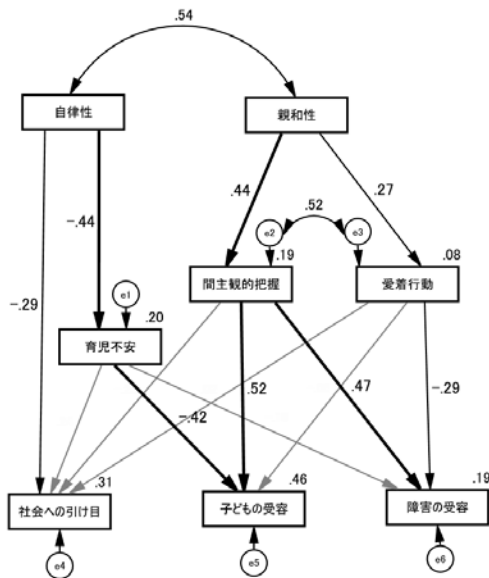


図1 ASD群の共分散構造分析の結果

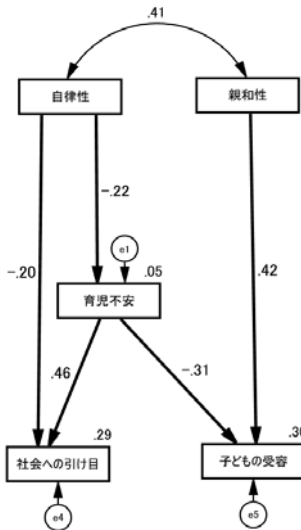


図2 定型発達群の共分散構造分析の結果

(2) 発達障害幼児の親支援プログラムの開発  
①プログラム概要

表1 親支援プログラム日程

	プログラム内容	宿題
1週	①自己紹介 ②子ども紹介(子どもの良い所、困った所)	家庭の子の様子を観察し、発達アセスメント票を記入
2週	①学習会「コミュニケーションとは様々な方法と理由」 ②グループワーク	コミュニケーションチェックリストを記入
3週	①学習会「コミュニケーション発達段階の特徴と目標」 ②グループワーク	家庭で、子どもの目標に合わせた関わり方をする
4週	①学習会「子どもと相互作用するための関わり方」 ②グループワーク	家庭で「子どもへの関わり方」をする
5週	①学習会「親子ふれあい遊び」 ②グループワーク	家庭で親子ふれあい遊びをする
6週	①宿題(親子ふれあい遊び)のふりかえり ②グループワーク	家庭で親子ふれあい遊びをする
7週	①宿題(親子ふれあい遊び)のふりかえり ②全体のふりかえり	

- ・週1回, 1回80分, 全7回
- ・対象者: ASD 幼児及び発達が気になる幼児(2~4歳)の母親5, 6名
- ・プログラム日程(表2): 学習会, グループワーク, ふりかえり, 宿題から構成。

②プログラムの内容

・第2週「コミュニケーションとは」  
コミュニケーションの方法には、「注視/参照視」「表情」「発声」「動作」「物の提示/手渡し」「リーチング/指さし」「オウム返し」「単語」「文章」があり、コミュニケーションの理由には表1に示す多様な理由がある。これを学び、母親は自分の子どもがどのようなコミュニケーションの方法と理由を用いているかを理解する。

表2 コミュニケーションの理由

コミュニケーションの理由	
	自分を落ち着かせる/慰めを求める
	抗議する/拒否する
要求する	飲食物/物/玩具 手助け/他の動作 遊びや歌を続けること 何かをする許可を求める
応答する	注意・行動に追従する 選択する 質問・働きかけに応える
挨拶	こんにちは さようなら
始発する	物/人/出来事に相手の注意を向けさせる 物/人/出来事にコメントする
話す/表す	過去/未来 感情
	ふりをする/想像する

- ・第3週「コミュニケーション発達段階の特徴と目標」  
幼児期のコミュニケーション発達を4段階に分類し(表3), 母親は自分の子どもがどの発達段階にいるのかを理解する。

表3 コミュニケーション発達段階

1.	芽ばえ段階
2.	リクエスト段階
3.	早期コミュニケーション段階
4.	コミュニケーション段階

- ・第4週「子どもと相互作用するための関わり方」

子どものコミュニケーションを発達させるためには、親子の相互作用を行う関わり方が重要であることを学び、子どもの発達段階に応じた日常生活での関わり方を工夫する。

- ・第5~7週「親子ふれあい遊び」  
親子の相互作用を行うためには、親子ふれあい遊びが最も効果的である。下記のような様々なふれあい遊びを学び、子どもの発達段

階に応じた家庭での親子ふれあい遊びを工夫する。

A. トンネル遊び



1. トンネルの中をのぞきこみながら子どもの名前を呼び、目を合わせる。
2. こっちにおいでと誘う。
3. 子どもがトンネルの中をハイハイし始めたら、出口まで来られるように応援する。  
例：手を叩いたり、名前を呼んだり、「がんばれ！」などと応援する。

B. ボールプール遊び



1. 親子でボールプールの中に座る。
2. 子どもの名前を呼んで、目を合わせる。
3. この状態で、話をしたり、ボールの投げ合いっこをする。

C. ボール遊び

1)



2)



3)



子どもの発達に合わせて、1) ボールを手渡しでやりとり、2) ボールを床に転がしてやりとり、3) 近い距離でボールを投げてやりとりを順次していく。

D. ハイハイで競争



1. 子どもがハイハイをしていたら、親はそれを真似してハイハイする。
2. 子どもの気持ちに合わせてながら、一緒にハイハイを楽しむ。
3. 「どっちが早いかな」などと声をかける。

(3) 発達障害幼児の親支援プログラムの検証  
開発した親支援プログラムを7名の母親に実施し、その事前事後の調査結果を示したのが図3である。「愛着行動」は全員で事前より事後の方が高くなった。「子どもの心通い合い」は、概ね事前より事後の方が高いかあるいは同じであった。「育児不安」は概ね事前より事後の方が低くなった。以上の結果から、開発した親支援プログラムは、愛着行動を高めるとともに間主観性把握である「子どもの心通い合い」を高める傾向があることが分かった。また、育児不安は軽減する傾向があり、本プログラムが親子の関係性を構築するとともに、母親の心理状態にも正の影響を及ぼすことが示唆された。

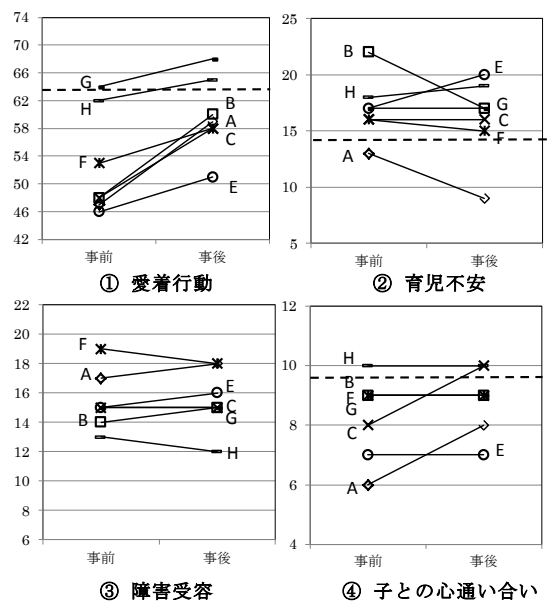


図3 対象者別の事前事後粗点  
\* 図中の点線は定型発達児の母親の平均値

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計8件)

- ①尾崎康子, 齋藤雅英, Toth Gabor, 発達障害幼児の親支援におけるアセスメントの予備的検討, 相模女子大学紀要, 査読無, 75C 巻, 2012, pp.109-121, [http://ci.nii.ac.jp/els/110008918375.pdf?id=ART0009875488&type=pdf&lang=jp&host=cinii&order\\_no=&ppv\\_type=0&lang\\_sw=&no=1431924533&cp=](http://ci.nii.ac.jp/els/110008918375.pdf?id=ART0009875488&type=pdf&lang=jp&host=cinii&order_no=&ppv_type=0&lang_sw=&no=1431924533&cp=)
- ②尾崎康子, 小林 真, 水内豊和, 阿部美穂子, 保育者による幼児用発達障害チェックリスト (CHEDY) の有用性に関する検討, 特殊教育学研究, 査読有, 2013, 51 巻, pp.129-135, [https://www.jstage.jst.go.jp/article/tokkyou/51/4/51\\_335/\\_pdf](https://www.jstage.jst.go.jp/article/tokkyou/51/4/51_335/_pdf)
- ③尾崎康子, 池谷佐和, 原田沙織, 松本美穂, 幼児期における自閉症スペクトラムのアセスメントと発達支援—三項関係の発達評価による事例研究, 相模女子大学紀要, 査読無, 77C 巻, 2014, pp.129-135, [http://ci.nii.ac.jp/els/110009886799.pdf?id=ART0010412414&type=pdf&lang=jp&host=cinii&order\\_no=&ppv\\_type=0&lang\\_sw=&no=1431924393&cp=](http://ci.nii.ac.jp/els/110009886799.pdf?id=ART0010412414&type=pdf&lang=jp&host=cinii&order_no=&ppv_type=0&lang_sw=&no=1431924393&cp=)
- ④尾崎康子, 自閉症スペクトラム障害の親支援にかかわる要因の探索的研究 — 間主観性, 愛着, 育児不安, 障害受容に焦点をあてて, 相模女子大学紀要, 査読無, 78 巻, 2015, pp.63-74, [http://ci.nii.ac.jp/els/110009890623.pdf?id=ART0010416918&type=pdf&lang=jp&host=cinii&order\\_no=&ppv\\_type=0&lang\\_sw=&no=1431924453&cp=](http://ci.nii.ac.jp/els/110009890623.pdf?id=ART0010416918&type=pdf&lang=jp&host=cinii&order_no=&ppv_type=0&lang_sw=&no=1431924453&cp=)
- ⑤Gabor Toth, Father's involvement in a parent-child development support programme for young children with developmental delay - a preliminary study, 子ども教育研究, 査読無, 7 号, 2015, pp.3-12

〔学会発表〕(計18件)

- ①Gabor Toth, Yasuko Ozaki, Masahide Saito, Preliminary study of assessment scales for parents/caregivers of children with developmental disabilities, The 14th World Congress of IASSID, 2012, Halifax(Canada)
- ②尾崎康子, トート・ガーボル, 齋藤雅英, 発達障害の親支援におけるアセスメントとプログラムの開発と検証—発達論的アプローチからの検討, 日本発達心理学会第25回大会, 2014, 京都大学(京都市)

③Gabor Toth, Yasuko Ozaki, Masahide Saito, How to Engage Fathers to Increase their Involvement while Taking Part in an Early Intervention-based Family Support Program, 4th IASSIDD Europe Congress, 2014, Vienna(Austria)

④尾崎康子, トート ガーボル, 発達論的アプローチに基づく親支援プログラム(1) —発達障害児の社会認知発達を促す支援, 日本発達心理学会第26回大会, 2015, 東京大学(東京都文京区)

⑤トート ガーボル, 尾崎康子, 発達論的アプローチに基づく親支援プログラム(2) —発達論的アプローチに基づく親支援プログラム(2) —発達障害児の感覚運動発達を促す支援, 日本発達心理学会第26回大会, 2015, 東京大学(東京都文京区)

〔図書〕(計2件)

- ①尾崎康子他, 文教資料協会, CHEDY 幼児用発達障害チェックリスト, 2014, 15
- ②尾崎康子他, 文教資料協会, CHEDY 幼児用発達障害チェックリスト解説書, 2014, 100

〔その他〕

2012年7月14日, 国際知的障害学会第14回世界大会優秀ポスター発表賞受賞  
International Association for the Scientific Study of Intellectual Disabilities(IASSID) "Best Scientific Poster Award" of the 14th World Congress in Halifax (Canada)  
Presentation title:Preliminary study of assessment scales for parents/caregivers of children with developmental disabilities.  
Authors: Gabor TOTH, Yasuko OZAKI and Masahide SAITO

## 6. 研究組織

(1)研究代表者

尾崎 康子 (OZAKI, Yasuko)  
相模女子大学・人間社会学部・教授  
研究者番号: 20401797

(2)研究分担者

トート ガーボル (Toth, Gabor)  
相模女子大学・学芸学部・教授  
研究者番号: 00448680

齋藤 雅英 (SAITO, Masahide)  
日本体育大学・体育学部・准教授  
研究者番号: 40339239